

立命館小学校 2024 年度学校目標年度末報告シート

教育目標

①	理念：世界を変えていく人が育つラーニング・コミュニティ～子どもと大人が挑戦をたのしみ、変化・成長し続ける学校～
②	育てたいコンピテンシー：挑戦・発見・創造・対話・協働
③	ラーニング・コミュニティの定義：児童だけが育つ場ではなく、児童・教職員・保護者がお互いの成長をそれぞれの形で応援し、育っていくラーニング・コミュニティである。誰もが完成した存在ではなく、成長のプロセスにある。成長の喜びを共有でき、同時に、成長の痛みをお互いに思いやれるような関係を構築していく。

重点目標

I.	五つの誓いを「根っこ」に据えた教育
II.	ピア・メディエーションを取り入れた関係づくり
III.	R2030 チャレンジ・デザイン構想の推進
IV.	社会情勢・教育・経営の観点からみた学校構造の見直し
V.	ミドルリーダーを中軸とした経営
VI.	周年行事を中心としたファン・サポーターづくり（顧客の創造）

I.

中位目標		達成目標（当年度目標）		評価
I	DEI の推進を軸とした心理的安全性の高い組織文化づくり	(1)	5つの誓いの理解促進と行動変容	○
		(2)	多様性尊重についての理解促進	◎
		(3)	5つの誓いを実践しやすい環境づくり	○

II.

中位目標		達成目標（当年度目標）		評価
I	自律的に課題解決できる関係づくり	(1)	仲間同士でつながり、乗り越えていける集団づくり（学年とハウス）	○
		(2)	お話し時間を通じた対話的スキルの向上	○
		(3)	「対話」を促進する「リフレクション」の実践	◎
		(4)	アセスメント指標を用いた個・集団の見取り方の提案	○
2	ピースフルスクールプログラム（PSP）の導入	(1)	学習する組織と PSP 実践研修の実施	◎
		(2)	PSP の児童へのプログラム構築と導入	◎

III.

中位目標		達成目標（当年度目標）		評価
I	立命館小学校版「教科横断探究学習」モデルの確立に向けて	(1)	既存の教育活動におけるテーマ学習に関わるカリキュラムの整理	◎
		(2)	試行的に実施する内容・体制の提案	◎
		(3)	次年度コミュニティ共生・創造の時間の単元計画表の提案	○
		(4)	教科カリキュラムの再構築	○

2	グローバル教育新 展開－学校国際化 と世界との協働学 習の日常化	(1)	逆ターム留学受入と今後の規模にかかわる受入校調査	◎
		(2)	ターム留学先との関係性の構築と受入に関する検討	◎
		(3)	Global Gateway Camp の持続可能なスキームの構築	◎
		(4)	12年を通じたグローバル教育の系統化	○
3	EdTech を活用し た自由な学びのス タイル構築	(1)	海外校とのオンライン協働学習の実施	◎
		(2)	個別最適化に向けたオンライン自主教材の活用	○
		(3)	プラットフォームの構築とクラウド管理の方策に関する検討	○
		(4)	デジタルポートフォリオの構築に向けた検討	○
4	教育ベンチャー事 業の挑戦	(1)	RITS ワールド：新しい企業団体との持続的なコラボレーション企画の実施と収益化	◎
		(2)	RITS プラス：本校の取組に関連した企画の充実と収益化	◎
		(3)	RITS アカデミー：成人対象の学びの場の創造と収益化	○
		(4)	事業の複数拠点化の検討	○
5	新たな時代の 12 年一貫教育	(1)	児童のその後の成長の追跡と状況把握	○
		(2)	進学先の複線化の可能性の検討	○

IV.

中位目標		達成目標（当年度目標）		評価
1	社会情勢・教育・ 経営の観点からみ た学校構造見直し	(1)	少子化・国際化・財政を統合的にみた学校構造見直しの検討	○
		(2)	学費値上げの検討	◎
		(3)		
2	働き方改革 3 年 の実施計画に伴う 中間総括の実施	(1)	働き方改革の視点からみた持続可能な組織のあり方の検討	◎
		(2)	中間総括の実施	◎
		(3)		

V.

中位目標		達成目標（当年度目標）		評価
1	教職員のミドル リーダーを中軸 とした経営	(1)	ミドルリーダーを中軸にしたピア・メディエーションを取り入れた組織づくり	◎
		(2)	サポートとレスキューの違いの認識と必要性の判断	○
		(3)		
2	保護者同士でつ ながり、支え合 う組織づくり	(1)	本部役員会、学級委員やFCを中心としたピア・メディエーション	○
		(2)	保護者サポーターの充実	◎
		(3)	保護者会コア会議での綿密な連携	◎
3	ラーニング・コ ミュニティの育 成を意識した協 働関係の構築	(1)	学校経営方針や理念・ステートメントの共有	◎
		(2)	安心安全な場づくり	◎
		(3)		

VI.

中位目標		達成目標（当年度目標）		評価
1		(1)	卒業生ネットワークの構築	○
		(2)	ホームページ特別サイトの創設、外部メディアの活用	◎

	卒業生ネットワークの構築と広報・発信の強化	(3)	関連企業や地域の方との密な連携	○
2	寄付文化の醸成	(1)	寄付金使途の明確化	◎
		(2)	刊行誌の発行	◎
		(3)	在校生寄付者の割合の向上	○

達成状況

I.	<p>五つの誓いを「根っこ」に据えた教育</p> <p>「DEIの推進を軸とした心理的安全性の高い組織文化づくり」について、5つの誓いをベースにして理解を進めようとした。全校集会でも具体的な場面とエピソードを交えながら、メッセージを送り、折に触れて、その大切さを児童に問う場面を意識的に設けた。</p>
II.	<p>ピア・メディエーションを取り入れた関係づくり</p> <p>「自律的に課題解決できる関係づくり」「ピースフルスクールプログラム(PSP)の導入」について、全10回の「学習する組織」に関する研修やオランダへの視察を行い、組織・集団づくりに対する考え方の共有と共通言語を揃えることができた。PSPのプログラムについても試行的に取り組み、次年度低学年から計画的に実践していきたいと考えている。</p>
III.	<p>R2030 チャレンジ・デザイン構想の推進</p> <p>R2030 前半期計画の5つの施策に対して、計画的に進められている。EdTechについては、どのようなツールやアプリを使うかを検討してきたが、その基盤がボトルネックになっている点もわかり、全体像の見直しについても取り組み始めている。</p>
IV.	<p>社会情勢・教育・経営の観点からみた学校構造の見直し</p> <p>「社会情勢・教育・経営の観点からみた学校構造見直し」について、社会情勢・教育情勢の状況を確認しながら、一貫教育部とも連携し、今後の検討のあり方について検討を始めている。「働き方改革3カ年の実施計画に伴う中間総括の実施」についても教職員と現状を確認し、今後の方向性を確認できている。働き方について、超過勤務時間の減少に加え、休暇取得50時間以上の割合も増加するなど改善傾向にあり、教職員のwell-beingにつながるよう寄与していきたい。</p>
V.	<p>ミドルリーダーを中軸とした経営</p> <p>「教職員のミドルリーダーを中軸とした経営」「保護者同士でつながり、支え合う組織づくり」「ラーニング・コミュニティの育成を意識した協働関係の構築」について、それぞれの関係性を高め、各々の課題等に対して自律的に運営できている。新カリキュラムの検討について、自発的にかかわっていただいた教職員も多く、ボトムアップ・ミドルアップの形で教育活動の検討も進めることができた。また保護者との連携数も増加し、その中でラーニング・コミュニティの考え方や価値観についてもブラッシュアップできている。</p>
VI.	<p>周年行事を中心としたファン・サポーターづくり（顧客の創造）</p> <p>「卒業生ネットワークの構築と広報・発信の強化」では、卒業生のネットワークづくりやホームページ特別サイトの創設、外部メディアの活用を積極的に行なっている。卒業生ネットワークのための公式LINEの登録者数は873（2025年1月15日現在）とその基盤を設け、広めていきたいと考えている。2025年10月からは、立命館小学校の設置準備室からおられる6名の先生方に、京都新聞での連載で、その思いも掲載いただく予定である。「寄付文化の醸成」について、2024年度の寄付金は直近10年で最高額を記録しており、多くのステークホルダーからのサポートをいただいている。</p>

改善策

I.	<p>五つの誓いを「根っこ」に据えた教育</p> <p>発達段階や個人の特性による課題もあるが、「公」と「私」の違い、自分の姿の客観視など、様々な立場からの視点取得が必要である。その考え方の根底には五つの誓いがある。これらの意味と日常生活を紐づけながら、児童がリフレクションしていきけるようにしていきたい。</p>
II.	<p>ピア・メディエーションを取り入れた関係づくり</p> <p>教員では、新カリキュラムについて有志の教員で検討をするなどして、ボトムアップ・ミドルアップで検討を進めてきている。また児童に対してもピースフルスクールプログラムを導入していきながら、自分たちで解決できるように取り組もうとしているので、これらを具現化し、自走できるような組織へと成熟していきたい。</p>

III. R2030 チャレンジ・デザイン構想の推進

R2030 前半期に掲げた内容については、おおよそ達成できてきている。次年度は後半期計画について議論を重ね、少子化も含めた将来構想を描いていきたい。

IV. 社会情勢・教育・経営の観点からみた学校構造の見直し

少子化を迎える中、小学校だけでなく、附属校全体のあり方、さらには学園全体での考え方を整理していく時期にきている。財政構造についても授業料と補助金収入だけに頼るものではない新たなスキームの構築が必要である。

V. ミドルリーダーを中軸とした経営

学校経営についても、今まで以上に柔軟に対応することが増加してきており、ますますミドルリーダーでの対応が必要となる。学校ビジョンを前提としつつ、各ミドルリーダーから学校全体を視野に入れた改革や方向性の提示がますます活性化できるようにしていきたい。

VI. 周年行事を中心としたファン・サポーターづくり（顧客の創造）

ラーニング・コミュニティを主体的に構成するファン・サポーターをさらに増やしていきたい。そのためにも現在の学校の情報発信、主体的にかかわれる仕組みなどを検討し、ファンディングパートナー、プログラムパートナー、リソースサポーターの3部門を構築できるように関係づくりを進めていきたい。

学校関係者評価に関する事項

委員会 構成	学校評議員:池坊雅史(池坊華道会事務総長) 学校評議員:岡野益巳(清和会会長 株式会社岡野組代表取締役会長) 学校評議員:齋藤茂(株式会社トーセ代表取締役会長 兼 CEO) 学校評議員:高須秀視(元・ローム株式会社社友 株式会社 SCREEN ホールディングス取締役) 学校評議員:中川哲(株式会社 EdLog 代表取締役社長 文部科学省初等中等教育局視学委員 GIGA スクール戦略担当) 学校評議員:平林幸子(京都中央信用金庫 元副理事長) 学校が必要と認めた者:岩佐亮(立命館小学校保護者会会長) 学校が必要と認めた者:久野信之(学校法人立命館常務理事(一貫教育担当))
開催日程 主な議題	<u>第1回学校関係者評価委員会</u> <開催日時> 2024年7月2日 13:30-15:30 <議題> 1. 校長挨拶 2. 委員の紹介 3. 2023年度の立命館小学校の自己評価について 4. 2024年度の立命館小学校の学校目標について 5. その他 <u>第2回学校関係者評価委員会</u> <開催日時> 2025年2月27日 13:30-15:30 <議題> 1. 校長挨拶 2. 委員の紹介 3. 2024年度の立命館小学校の自己評価について 4. 2025年度の立命館小学校の学校目標について 5. その他

第1回学校関係者評価委員会

【広報】

- 外部でのイベントについて、従来の本校に興味のある子育て層に対する入試広報だけでなく、受験層とは違ったターゲットに対してイベントを行ったことについて、評価いただくと共に、いかにして継続させるかが問われた。
- 卒業生や中高大の関係者へのアプローチも大切であり、そうした関係性が交友会にもつながるようにお願いしたい。
- EARTHのプロジェクトも含めて、新しい発信にチャレンジされており、立命館の魅力をどんどん発信してほしい。

【教員の働き方】

- 広報も含め、新しいチャレンジは素晴らしいと思う一方、働き方改革もあり、限られた時間やリソースの中で、質が下がることがないのか懸念された。先生方がよく働かれるが、人が十分に足りるような運営が必要ではないか。
- 特別免許の申請について、その必要性を感じる一方で、行政では柔軟性が乏しく、日本の教育機関の人材確保には様々な課題が残されている。

【一貫教育】

- デジタル基盤を整備する際、12年間で振り返られるプラットフォームがあるとよい。大学も連携してできれば、それがバリューになる。
- こうしたプラットフォームが校友会や卒業生ネットワークとも連動できれば、さらに素晴らしいものになる。

【周年事業】

- 校歌プロジェクトについて、児童の立命館に対するアイデンティティを高めるものになると思われる。

【卒業生とのつながり】

- 外部人材を活用されながら授業を進めておられ、学んでいることが社会の役に立つこととつながり、学ぶ意味や意欲とつながっていると思う。立命館小学校出身者も徐々に増えているので、卒業生が専門人材として活躍することも魅力だと思われる。

第2回学校関係者評価委員会

【自己評価】

- 2024年度の自己評価について概ね賛同できる。

【STEAM教育】

- 生成AIもどんどん発展しており、2045年といわれていたシンギュラリティが2029年と前倒しになってきている。スマートグラスなどの開発も進んでおり、知識の暗記は本当に必要がなくなってきており、逆にいかに知識をつなげるかが問われている。教育の目的が知識の習得から、創造性・表現力・体験へと移行している。先進的に取り組んでおられるとは思いますが、そうしたことを学ぶきっかけをぜひ教育の中に組み込んでいただきたい。
- AIにできないのは、決定することであり、「自己決定」の機会も大切にしていきたい。
- 社会見学後にAdobeアンバサダーと協働し広報動画を制作するなど、ツールと創造性を結びつけた実践が行われている。こうした活動は、理数系の知識を応用的に使う力や、アートとテクノロジーの融合的な思考力を養うSTEAM的な学びの体現ともいえる。

【探究的な学び】

- 「コミュニティの時間」では、児童が自ら調べ、創造し、提案する活動が展開され、音楽・映像・身体表現など多様なアウトプットが奨励されている。
- 社会見学や体験学習においても複数のコースから自分で選ぶ仕組みを取り入れることで、学びへの主体性が引き出されている。
- このような体験を通して、子どもたちは「なぜ学ぶか」「何を伝えたいか」といった根源的な問いと向き合い、自発的な学びへとつながっており、今後もこうした活動を大切にしていきたい。

【国際交流】

- 海外では、人前で発信することが問われ、その発言力が評価される。日本ではその場の空気を読むことが問われる。そうした違いを知り、どちらにでも対応していけるような力、とりわけ発言力は意識して教育していかないと身につかない。
- 京都学についてのパンフレット案ができあがり、評価いただいた。タイトルが「京都学」になっているが、さまざまな場所で京都学という言葉が使われていることから、「立命館小学校の京都学」とするのがよいのではないかとご助言いただいた。
- APUとの連携も魅力的である。国内にいて、あれだけの国際学生や他国の文化を学べる場所はない。また STEAM 教育とも絡めると、九州では半導体産業が誘致されており、そうした連携と絡めて APU と連携したらどうか。

【広報】

- 周辺地域でも児童数が減少している中、立命館小学校では受験者数は確保できている。ただし、次年度の最終的な入学者数が定員（120 人）を割ることがあり、志願者の歩留まりが課題である。志望度の事前把握や入試対応で工夫しているが、予測困難な抜け（特に首都圏などからの受験）がある。
- 補欠制度の導入には流動的なリスクもあるため、慎重な運用が求められている。多様で魅力ある教育内容による第一志望の層をどう増加するかが今後の鍵である。
- 立命館大学との連携を通じた魅力ある教育は、将来的な進学やブランド力につながる要素である。また学校の教育内容に英訳も含めるなど、世界に向けた発信力を強化していくことも大切である。